

子どもの居場所を探しています

学校から、子どもの歩く速さで 5 分程度の場所で発達障がいや事情により児童センターや自宅で過ごせない子や課題のある子の勉強や放課後過ごせる居場所を探しています。

ちょっと放課後過ごしたり、遊んだり、一緒に勉強をしたり、好き勝手に過ごせる場所が小学校の高学年、中学生にも必要です。

【たとキッズあおきの自動販売機ですが、価格高騰のため価格改正がありました。】



コラム ～ 障がいとは？という話を考えています ～

このチラシが配られている頃にはすでに終わっていますが、中学校1年生の授業の中で、「障がいとは」という話をさせていただく機会をいただきました。

今は、当日のスライドを作っているところですが、うまく伝わるか少し気になっていますが。スライドは、以前、介護保険のヘルパーになられる方が取得する資格、介護職員初任者研修の講義を担当していた頃に使っていた資料をアレンジしたものを使う予定です。

とはいえ、数年前のスライドなので、最新の情報に修正をしていく中で改めて知ったことがあります。

障がい者と言っても、様々な症状の方が居て身体障がいの方から、知的障がい、発達障がいと診断も1万人居れば、1万通りの診断があり決して1つではありません。

ただ、便宜上「障がい」という分類にしなければならない理由があります。私は、この仕事を初めてから約20年が過ぎました。その中で、なんとなく感じていたのですが、改めて確認出来たこと、それは、障がいと診断される方が確実に増えているということです。

特に私が関わっている障がいたと「発達障がい」と診断される方ですが、大学生や専門学校生における発達障がい者の占める人数が、2006年度は2.6%（100人いれば約3人）だったのに対して、2020年度は28.4%（100人いれば約29人）にまで増えているということでした。なぜ増えたかという理由ですが「社会での認知の高まりに伴って」ということが大きな理由です。そう、研究の結果、何か大きな環境の変化がない限り一定の人数、毎年何らかの障がいを持って生まれています。これは統計的に大きくズレることはありません。ただ、この発症率が確実に増えているのは、それ以外に「認知」ということが大きく関わっています。昨今、「大人の発達障がい」という言葉が流行りのように耳にすることがあります。以前は、子どもの頃、生きづらいと思いつつも何も手立てがなかったり、ただ「落ち着きがない子」「やんちゃなガキ大将」と呼ばれていた方の中に一定数、今では発達障がいと診断される方がいたが、それは「障がい」ではなく「育て方」のせいにされたりしていたのが、現在は、正しく「発達障がい」と産まれた時から何らかの生きづらさを持っていることがわかるようになったために増えたということなのです。これからは、その生きづらさをうまく工夫しながら活用して、自分らしい生き方を見つけていく時代になってきたのかもしれない。障がいとされている状態も、あと10年ぐらいたら障がいではなく “当たり前” になっているのかもしれないね。

裏面も読んでいただき、何かお子さんに不安や心配事などがありましたら、村の保健師や教育委員会、たとキッズあおきまで、ご相談いただければ対応いたします。

たとキッズあおき (NPO法人たと。)

TEL 0268-75-6789

青木村田沢3075-1

■開所時間 9:00-17:00

■定休日 土日祝日

NPO法人たと



場面緘黙(かんもく)症と吃音(きつおん)症

2022.11

家では元気に話すのに、外に出ると全くしゃべらなくなる。「人見知りが強いのかな」とか先生から、学校ではぜんぜん話をしないとされたことがある。そんな経験はありますか？また、話そうとしているのに言葉がうまく出てこなくて苦労しているお子さんはいませんか？全員ではありませんが、そんなお子さんの中には “場面緘黙症” や “吃音症” に悩んでいる子がいるかもしれません。今回はこの2つの症状について説明します。

2つの症状は、原因や症状は全く違いますが、関連して同時に発症している子もいるので紹介します。また、この2つの症状がある方の中には、発達障がいの特徴がある方もいらっしゃいます。

場面緘黙(かんもく)症

家や家族のいるところだと、元気にしゃべることができるのに、一人になったり学校や外に出かけると、まったくしゃべらなくなってしまう事があり、先生などが心配されている経験のある方はいらっしゃいますか？

冒頭にも書きましたが、このような場合「人見知りが激しい」ということで済まされてしまうこともあるようです。

では、どのような子がこの症状を発症するのでしょうか。

一般的に知られている中でも多いのが「ストレスを感じているから」というのが多いようです。

直接的な要因が3つ、間接的な要因が1つあるとされています。



遺伝的な要因	家族や親類の中に同じような症状を持っている方がいる場合
社会的、文化的な要因	子どもの周囲でコミュニケーションをとるのが難しい環境の場合
症状が発現する引き金となる要因	本人がその状況を怖い・不安と感じる場面を体験した場合
症状を固定させてしまう要因	上のような状況が続き、改善されずにいる場合

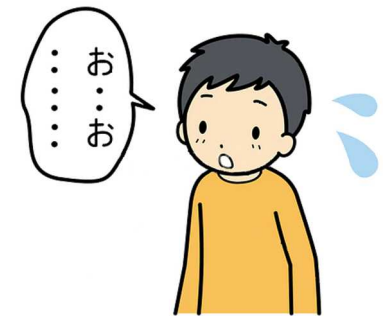
すべての状況において、脳のしくみが影響しています。話さない事、話せない事を理解できず、何度も聞いてしまう。話すように促していくなど、本人にとってそれがまたストレスを生む要因になることで、表の一番下のように固定化されていき、回復に長い時間を要することがあります。

緘黙症は、絶対に治るとは言い切れませんが、安心できる環境や無理せず過ごせる環境や関わりを作っていく、新しい場所では無理をさせないなどの配慮が、改善の糸口になり、次第に人前でも話ができるようになっていく可能性が高くなっていきます。

吃音(きつおん)症

吃音症は、言葉をうまく発する事ができない。「こ、こ、こんにちは」のように音を繰り返してしまう(どもり)や、必要のないところで「こーんにちは」など言葉が伸びてしまう、「・・・こんにちは」のように言葉を出せずに間があいてしまうなどがあります。勘違いされてしまう症状に「チック症」などいくつかの症状がありますので、またこれは次号に取り上げていきたいと思いますが、今回は吃音症です。

これは、話すことに苦手さが出ている症状です。



吃音症が出やすい状況など

苦手な行の言葉を読まなくてはならない時	吃音のある子の中には「さ行」「い行」など苦手な音や言葉がある人がいます。その言葉を発する時に意識しすぎるために出る事があります。
周りの目を気にしすぎたり、不安な時	周りから笑われたり、からかわれた経験があると、周りの目を気にしてしまうときに出る事があります。
どもらないようにと意識しすぎたとき	周りの人を意識しすぎて、何か思われたり言われたりするのではと思い、どもらないように意識しすぎると出る事があります。

これ以外の状況でも、緊張をしたり意識しすぎたりすることで出る場面があります。

成長と共に症状が治まってくる場合もありますが、緊張しないように配慮をしたり、周りがゆっくり話すようにしたり、本人の目の前の話題にする、話しやすい環境を作るようにすることで改善されることがあります。

気にしすぎる事で結果的に、緘黙症(人前で話すことを嫌う)の症状も同時に出てくる場合もありますが、多くの場合、原因は周囲の理解がありますので、周りが支えてあげる事が改善の一歩になります